

令和元年産水稻の生育状況と今後の対策 (水稻生育診断技術確立調査－4号)

農林総合研究センター
令和元年6月18日調査

気象経過

< 平年対比 >

【平均気温】

- ・ 6月第2半旬は、金沢は低く、輪島は並（平年差：金沢 -0.6°C 、輪島 $+0.3^{\circ}\text{C}$ ）
- ・ 6月第3半旬は、金沢は高く、輪島は並（平年差：金沢 $+0.5^{\circ}\text{C}$ 、輪島 $+0.4^{\circ}\text{C}$ ）

【日照時間】

- ・ 6月第2半旬は、金沢、輪島ともかなり少ない（平年比：金沢 31%、輪島 32%）
- ・ 6月第3半旬は、金沢、輪島ともかなり多い（平年比：金沢 149%、輪島 142%）

【降水量】

- ・ 6月第2半旬は、金沢、輪島ともかなり多い（平年比：金沢 288%、輪島 338%）
- ・ 6月第3半旬は、金沢は少なく、輪島はかなり少ない（平年比：金沢 61%、輪島 47%）

【1ヶ月予報】

6月13日発表の1か月予報（6月15日～7月14日）では、平年に比べ曇りや雨の日が少ないでしょう。向こう1か月の平均気温は、低い確率50%です。日照時間は、平年並または多い確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、低い確率50%です。2週目は、低い確率50%です。

生育概況等

【本田の生育】

1. 草丈は、コシヒカリは平年比94～119%（県平均：105%、加賀：104%、能登：107%）と、加賀地域は平年並で前年よりやや長く、能登地域では平年よりやや長く、前年より長い。
ゆめみづほは、近年比102～123%（県平均109%、加賀：109%、能登：110%）と加賀地域は近年よりやや長く前年より長く、能登地域は近年及び前年より長い。
ひやくまん穀は、近年比105～116%（県平均：112%、加賀：114%、能登：110%）と加賀地域、能登地域のいずれも近年及び前年より長い。
2. 茎数は、コシヒカリは平年比64～138%（県平均：105%、加賀：102%、能登：110%）と、加賀地域及び能登地域のいずれも平年並で前年よりやや多い。
ゆめみづほは、近年比93～152%（県平均113% 加賀：114%、能登110%）と加賀地域で近年よりやや多く前年より多く、能登地域で近年及び前年よりやや多い。
ひやくまん穀の近年比109～184%（県平均：137%、加賀：116%、能登：174%）と加賀地域で近年よりやや多く前年より多く、能登地域では近年及び前年より多い。
3. 葉齢は、コシヒカリは平年比 $-0.2\sim+0.9$ 葉（県平均 $+0.3$ 葉：加賀： $+0.3$ 葉、能登： $+0.3$ 葉）となっており、平年に比べ加賀地域、能登地域のいずれも2日程度早い。
ゆめみづほは近年比 $-0.2\sim+0.4$ 葉（県平均： $+0.2$ 葉、加賀： -0.1 葉、能登： $+0.2$ 葉）となっており、加賀地域で近年並～1日程度早く、能登地域で近年より1日程度早い。
ひやくまん穀は近年比 $-0.7\sim+2.3$ 葉（県平均： $+0.9$ 葉、加賀： ± 0 葉、能登： $+1.7$ 葉）となっており、近年より8～9日程度、前年より6日程度早い（能登地域では田植えが前年より早まったため）。
4. 葉色の発現は、コシヒカリは平年比 $-0.3\sim+0.2$ （県平均： ± 0 、加賀： ± 0 、能登 ± 0 ）となっており、平年並みとなっている。
ゆめみづほは近年比 $-0.6\sim+0.6$ （県平均： -0.1 、加賀： -0.1 、能登： -0.1 ）となっており近年並となっている。

ひやくまん穀は近年比±0～+0.7（県平均：+0.2、加賀：+0.2、能登：+0.3）となっており近年及び前年よりやや濃くなっている。

m²当たり莖数（平年、前年）及び株当たり莖数

コシヒカリ	県平均	499本	（平年比 105%	前年比 118%）	27.7	本/株
	加賀	503本	（平年比 102%	前年比 118%）	27.6	本/株
	能登	493本	（平年比 110%	前年比 119%）	28.0	本/株
ゆめみづほ	県平均	583本	（近年比 113%	前年比 123%）	32.7	本/株
	加賀	627本	（近年比 114%	前年比 123%）	35.0	本/株
	能登	494本	（近年比 110%	前年比 122%）	28.0	本/株
ひやくまん穀	県平均	411本	（近年比 137%	前年比 131%）	21.0	本/株
	加賀	446本	（近年比 116%	前年比 129%）	23.3	本/株
	能登	375本	（近年比 174%	前年比 135%）	18.7	本/株

【病害虫の発生状況】

いもち病の発生は確認されていないが、発生は平年並と予想されている。現在の雑草地における斑点米カメムシ類の発生は平年よりやや多く、斑点米カメムシ類の発生は多と予想されている。

[病害虫発生病害虫発生予報第3号（令和元年6月13日付）参照]

当面の対策

1. 乳白粒の発生防止のため、中干しを継続し、遅発分けつの発生抑制、籾数過剰防止に努める。まだ中干しを行っていない圃場では、直ちに中干しを実施する。
2. 用水量が十分確保できない地域においても、根の活力向上を図るため、田面の亀裂が生じない程度に中干しを実施する。
3. 5月20日以降に移植が行われたほ場においても、分けつの発生が旺盛となることを見込まれることから、中干しを早急に開始する。
4. 中干し効果を高めるため、溝切りを実施する。なお、溝切り間隔はほ場の排水条件に応じ、10～15条間隔とし、末端を排水溝に接続する。
5. 加賀地域の早生品種では幼穂が確認（0.2～0.5mm）されており、早生の中干しについては、幼穂形成期（出穂前25日～15日）を迎える6月25日頃までとし、以後、間断通水による飽水管理を行う。
6. 幼穂形成期（出穂前25～15日）に18℃未満の最低気温が予想される場合は、水深10cm以上の深水管理とし、不稔籾の発生防止に努める。
○早生品種の耐冷性： 五百万石（弱）、ゆめみづほ（中）、能登ひかり（中）、ほほほの穂（中）、石川門（強）
7. 稲体の健全化を図るため、ケイ酸質資材が未施用のほ場では直ちに施用する。
8. 早生品種で分施肥体系による施肥管理を行う場合は、幼穂を確認し施用すること。なお、1回目の穂肥は幼穂1～2mmを確認したうえで施用する。
9. 中後期の雑草防除については、初中期一発剤の効果は1カ月程度であるため、その後品種別の収穫前日数を確認した上で後期除草剤を散布する（次ページ参照）。

< 品種別の収穫前日数の目安 >

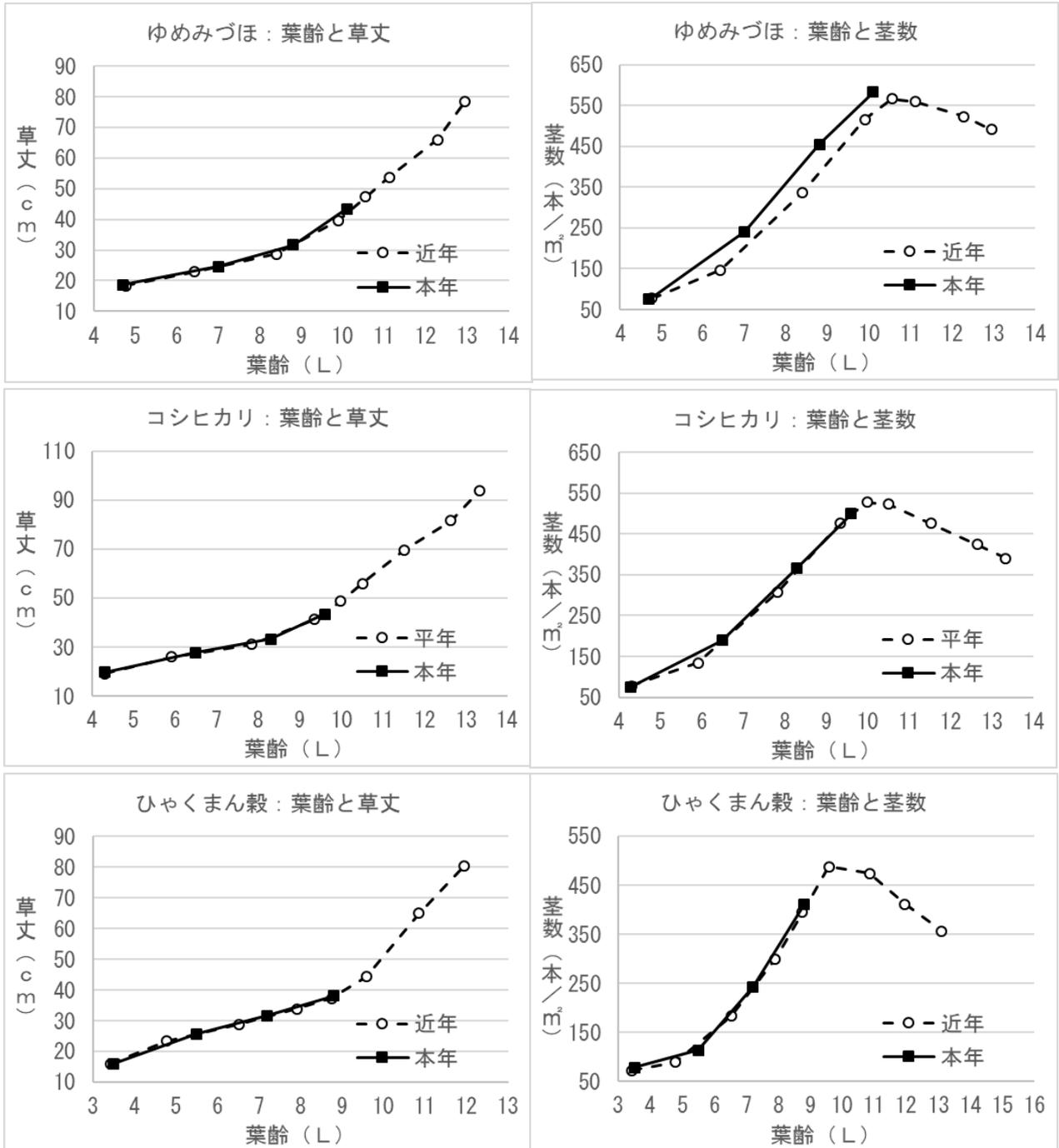
加賀	田植日	移植後55日	収穫60日前	収穫50日前	収穫45日前	収穫30日前	収穫予想日
ゆめみづほ			6月23日	7月3日	7月8日	7月23日	8月22日
コシヒカリ	5月2日	6月26日	7月9日	7月19日	7月24日	8月8日	9月7日
ひやくまん穀			7月23日	8月2日	8月7日	8月22日	9月21日

能登	田植日	移植後55日	収穫60日前	収穫50日前	収穫45日前	収穫30日前	収穫予想日
ゆめみづほ			6月30日	7月10日	7月15日	7月30日	8月29日
コシヒカリ	5月5日	6月29日	7月19日	7月29日	8月3日	8月18日	9月17日
ひやくまん穀			8月1日	8月11日	8月16日	8月31日	9月30日

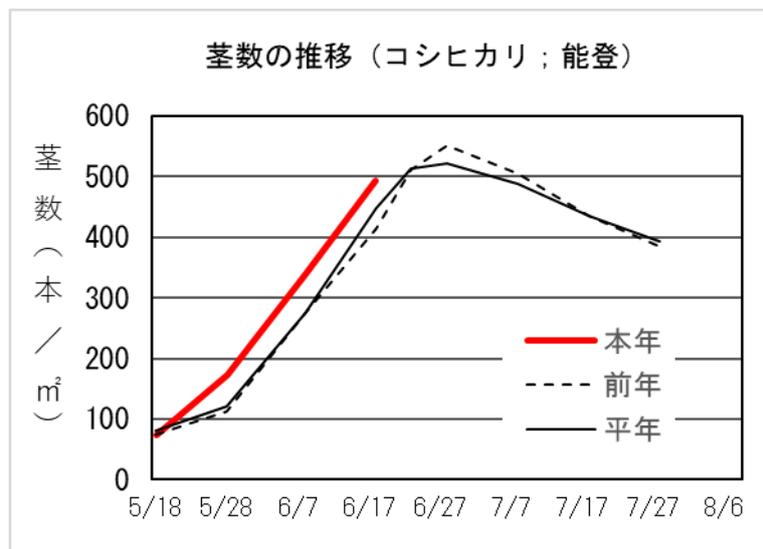
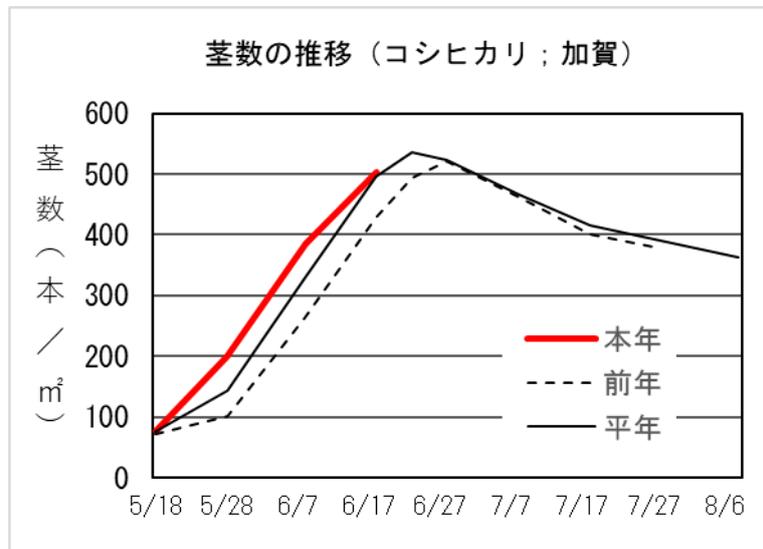
10. いもち病の発生は並と予想されているが、一旦発生すると急進展する恐れがある。発生状況の把握に努め、発病が認められたら直ちに防除する
11. 紋枯病については、前年発生した圃場、茎数の多いほ場では多発する可能性があるため防除を実施する。薬剤によって散布適期が異なるので、使用薬剤の基準に従う。
12. 白葉枯病の防除については、過去に多発した地域で予防剤を箱施薬していない場合は、予防剤を6月20～30日に散布する。
13. 斑点米カメムシ類の防除については、発生密度を下げるため、生息場所である農道、畦畔、休耕田および遊休地等の除草を徹底する。除草を集落など地域全体で一斉に実施すると密度低下の効果が高い。なお、刈り払った雑草は用排水路に入らないように注意する。

<参考：草丈の伸長および茎数の増加傾向>

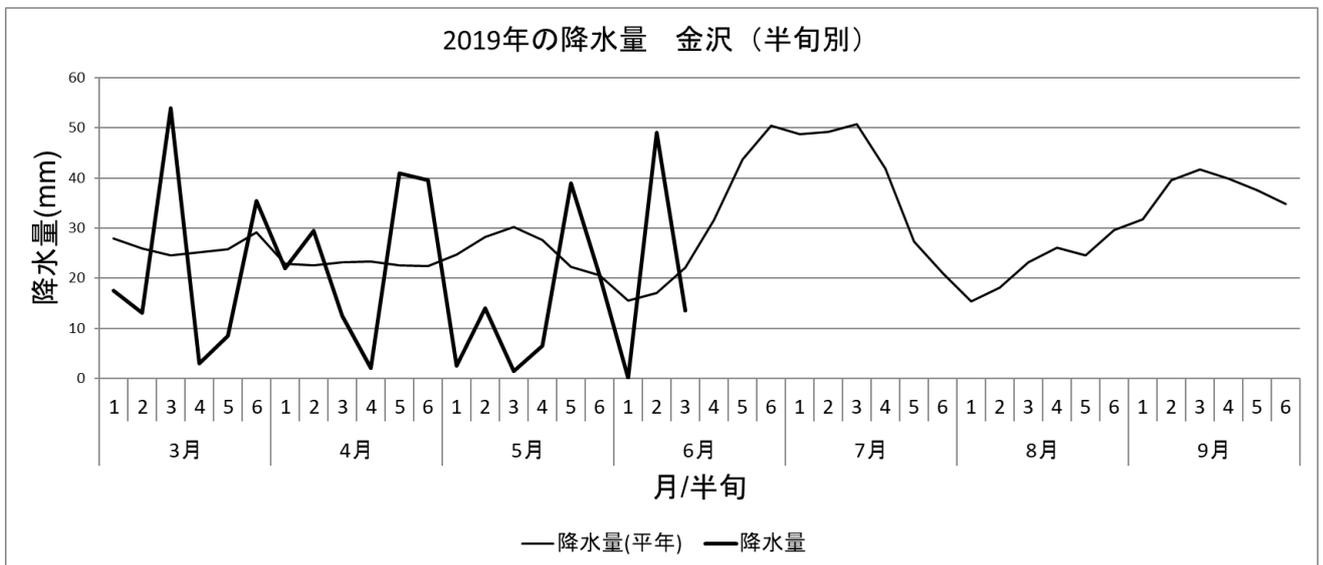
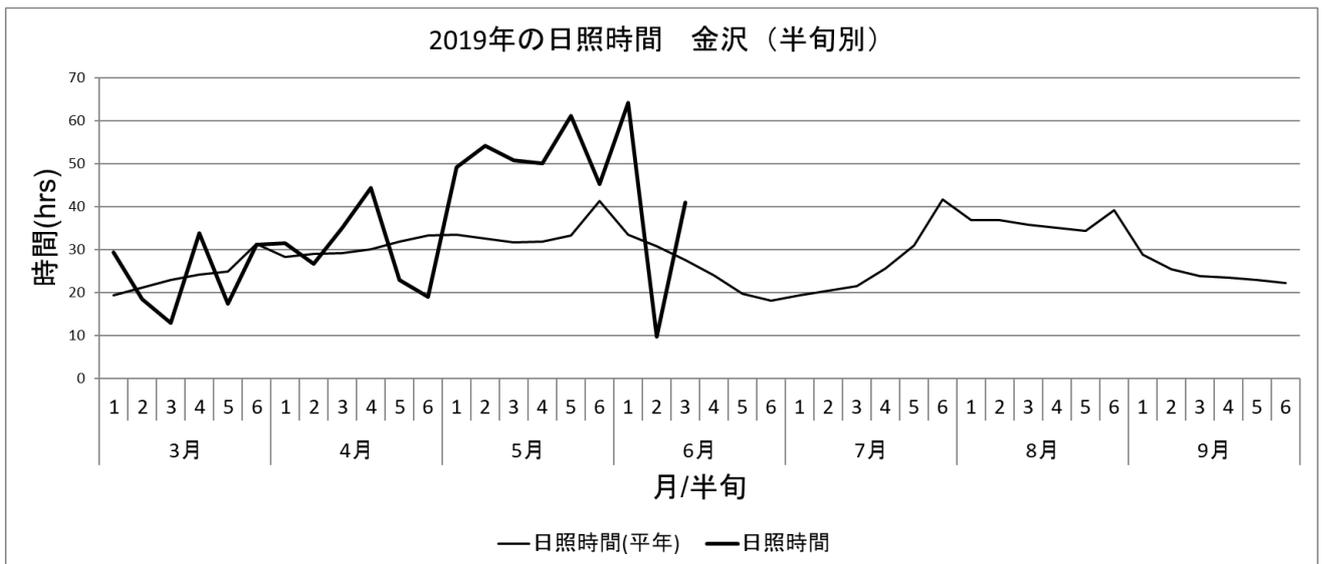
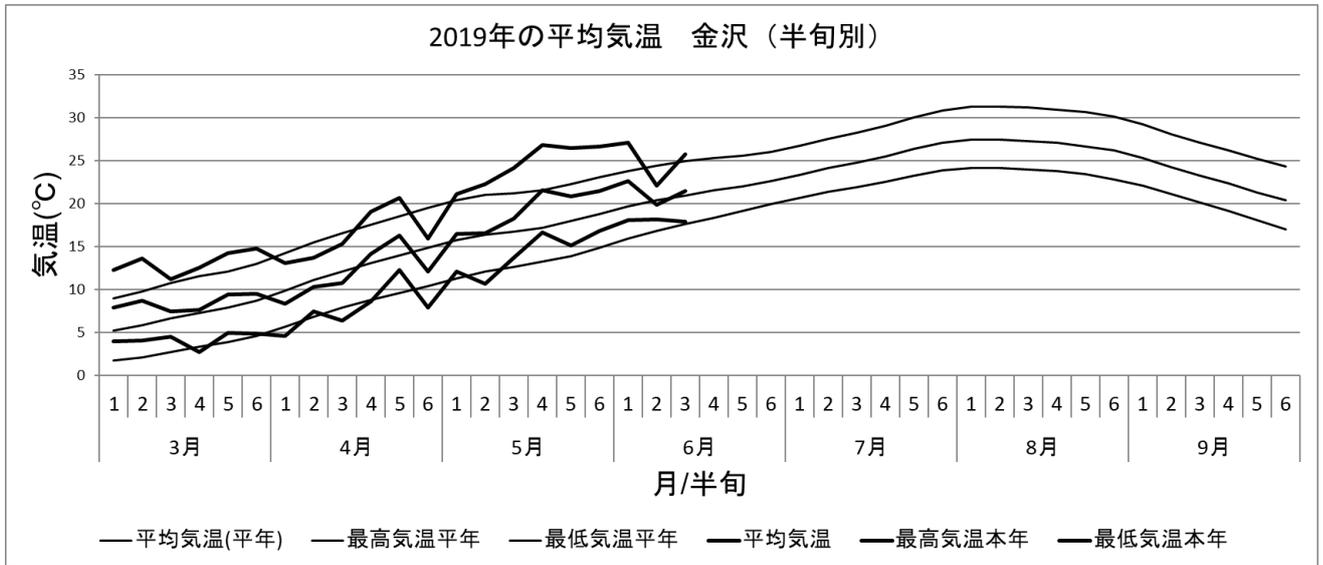
- ・ 葉齢を基に草丈の伸長および茎数の増加を平年と比較すると、ゆめみづほは草丈は葉齢展開に見合った伸長となっているが、茎数は葉齢展開より多くなっている。
コシヒカリは葉齢展開に見合った草丈及び茎数となっている。
ひやくまん穀は葉齢展開に見合った草丈及び茎数となっている。



・また、調査日を基にコシヒカリの茎数増加を平年及び前年と比較すると、加賀地域では平年並で前年よりやや多く、能登地域は平年および前年よりやや多くなっている。



気象経過イメージ（金沢気象台）



気象経過イメージ（金沢気象台）

